

2015年度 帰国隊員/青年支援プロジェクト 実施報告書		提出日 2016年 9月 20日
氏名： 田村 雅文	実施国：日本	協力活動・調査研究
活動名称	紛争下における人々のライフヒストリー調査～シリア国内及び周辺国に逃れたシリア人を事例として～	
実施期間	2015年7月1日 ～ 2016年6月30日	
(1) 申請した動機		
<p>2011年に始まったシリアの混乱は長期化し、難民・国内避難民を合わせた数は、紛争開始前のシリア全人口の約50%にも至る。そうした中、シリアの市民社会の状況、あるいは市民の声はほとんど聞こえてこず、紛争に翻弄される人々の状況は常に置き去りにされている。</p> <p>申請者は、この状況に危惧を抱くシリア協力隊OVとともに、2013年に任意団体「シリア支援団体サダーカ」を立ち上げ、ヨルダン首都アンマンを拠点とし、都市部に避難している難民の家を訪問して必要な支援について聞き取り調査を行ってきた。2005年から2007年にかけて環境教育隊員として農村部等で聞き取り調査を行った経験と当時の人脈を活かして、アンマンに住むシリア人避難民の実態と適切な支援を探るべく、ヨルダン人カウンターパートとともに家庭訪問を繰り返し、寄付金を資本に物資面の支援を行ってきた。</p> <p>しかし、紛争の長期化、情勢の複雑化に伴い、難民の流出は増え続け、難民キャンプであれ都市部であれ、支援は限界を超えている。また、これまでの聞き取り調査から、避難先での支援の充実がシリアの人たちの幸福に必ずしもつながらないことも明らかになってきている。このような現状から、申請者は、難民への実際的な支援を行うだけでなく、彼らのライフストーリーや想いを記録し、紛争が人々の生活や意識に与える影響を明らかにすること、さらにそれを学術的な場、さらにはフリーペーパーという形で一般に広く公表することで、シリアの平和構築という長期的な視野を持った支援のあり方を皆で考えていくことの必要性を強く感じ、ワーキンググループを結成した。しかしながら、資金を工面することが難しく、今回の帰国隊員支援プロジェクトの申請に至った。</p>		
(2) 活動内容概要		
<p>当初の本プロジェクトの目的は、シリアの平和構築、ひいては難民を生む構造の変革という長期的な視野を持った支援のあり方を考えることであり、目的を達成するために、(1)シリア人へのライフストーリー・インタビュー、(2)インタビュー成果の記述と分析、(3)記述・分析成果の公表の3つを活動内容として策定していたが、以下の2つの理由から、活動内容を(1)と(3)に特化させた。</p> <p>1つ目の理由は、日本におけるシリア難民等受入れに関わる情勢の変化である。2015年5月、日本政府は2017年から5年間で150人のシリア難民等を留学生として受け入れる方針を発表した。これにより、今後、日本の高等教育機関およびその周辺の地域住民は、シリア難民等と頻りに交流の機会を持つことになる。しかし、多くの日本の人々にとっては、シリアは地理的にも遠く、その文化や宗教的背景を理解している者は少ない。また、2010年の紛争開始後は、「紛争」「難民」「テロ」等、シリアに関するネガティブな印象がマスメディアを通して広がっている。申請者は、ヨルダンにおけるシリア人難民支援の経験から、受け入れ側との交流の欠如が、難民の経済的困窮を引き起こすのみならず、その心身に深刻な負荷を与えることを知った。そのため、2017年の受け入れに向け、インタビュー成果を一般に分かりやすい形で提示し、受け入れ側となる日本人にシリアについての理解を深めてもらうことが急務であると考え、フリーペーパー作成を活動の中心に据えることにした。</p> <p>2つ目の理由は、助成額が申請時よりも削られたことである。これにより、当初予定していた学会参加のためのヨルダン-日本間の旅費をねん出することが難しくなった。そのため、本助成における活動は、skypeによるインタビューの実施とその成果をフリーペーパーとしてまとめることに絞り、学術的な成果の発表は、将来的に他の助成により行うこととした。</p> <p>フリーペーパー作成の目的は、日本の人達にシリアの日常生活や文化についての理解を深めてもらうこと、また、将来身近な存在になりうるシリア人難民等との交流のきっかけを提供することで</p>		

ある。この目的を考慮し、初回のテーマは「シリアのお菓子」とした。また、一般の人達が手に取りやすく興味を持ちやすい形態を目指し、冊子作りの経験を有する編集者・清田隆之氏、デザイナー・今城加奈子氏に協力を依頼した。両氏はフリーペーパー作成の趣旨に賛同し、比較的安価な謝金で作成に携わってくださった。

2016年2月から3月にかけて、シリア人協力者6名（日本在住者2名、シリア在住者4名）を対象にライフストーリー・インタビューを行い、そのインタビュー内容の中から同テーマに合致する部分を抜き出し、2016年4月以降、編集者のアドバイスのもと、内容をまとめた。また、シリアについての理解を深めるための活動の一環として、2016年6月に、福岡にて「シリア人留学生から学ぶシリアのお菓子作り」を開催した。また、このフリーペーパーによりシリアに興味を持った人達がより深い情報を得られるよう、シリアの紛争や難民支援に関する情報入手先も併せて記載した。以下、活動内容の概要である。

2015年7月-9月	ワーキンググループ内での役割分担及び今度の活動計画の確認。 インタビュー可能なシリア人協力者の選定とインタビュー依頼。
2015年11月	申請承認。助成金額が決定。
2016年12月	ワーキンググループ内で活動内容、活動計画の見直し。 フリーペーパー作成を活動の中心に据えることを決める。
2016年2月-3月	シリア人協力者6名にskypeを通してインタビューを実施。 インタビュー内容を書き起こし、テーマである「お菓子」を中心に内容をまとめる。
2016年4月	編集者・デザイナーとの打ち合わせ。フリーペーパーのページ割と必要な素材をまとめる。
2016年5月	シリア在住者の協力の元、必要な写真を収集。
2016年6月	「シリア人留学生から学ぶシリアのお菓子作り」として、福岡在住のシリア人留学生3名・エジプト人留学生1名の指導のもと、「クナーフェ」作りを実施。ワーキンググループメンバーの他、5名の日本人も参加。
2016年6月	冊子の編集・校正作業。6月末日、印刷会社より納品。

(3) 活動の成果・苦勞した点・反省点等

【活動の成果】

シリア滞在経験があり、シリアについて知識を有する申請者および協力者だけでなく、シリアについて知識を有しない編集者・デザイナーに協力をしてもらったことで、一般の人達が手に取りやすく、シリアの日常生活や文化について興味関心を持ちやすいフリーペーパーを作成することができた（右図1,2参照）。このフリーペーパーを契機とし、今後シリア難民・避難民を受け入れる高等教育機関やその周辺地域の人達とシリアの人達との交流が促進されることを強く期待する。



図1 冊子表紙

【苦勞した点】

フリーペーパーの作成において最も苦勞した点は、シリア在住者へのインタビューの実施である。本活動では、4名のシリア在住者にskype, SNSを通じてインタビューを行ったが、彼らの住むダマスカスは現在停電が非常に多く、インターネット環境も良いとは言えず、定期的に連絡を取ることが非常に困難であった。また、負荷の高い映像を伴う通信が実現することはさらにまれであり、互いの話す内容が伝わらないことも多々あった。しかし、彼らはフリーペーパー作成の趣旨を深く理解し、私達の活動に最大限協力してくれた。フリーペーパーに使用できるよう、今もなお街角で売られているお菓子の写真を撮り、メールで送付してくれた協力者



図2 インタビューページ

もいた。

【反省点】

反省点は、フリーペーパーの完成が予定よりも遅れたため、活動期間中に配布を終えることができなかったことである。当初は、留学生としてのシリア難民受け入れに関わるであろう高等教育機関、地域団体・住民に同紙を配布し、その感想や反応を調査することで、今後のフリーペーパーの内容改善や配布先の選定につなげる予定であった。配布および受け入れ側の反応や意識変化に関する調査の実施は、今後の課題である。

(4) 今後のプラン

今後は以下の3つの活動を順次実施する。

まず、作成したフリーペーパーを、留学生としてのシリア難民受け入れに関わるであろう高等教育機関、地域団体・住民に配布する。その際、(3)で述べた通り、フリーペーパーの存在により、受け入れ側のシリアに対する意識が変化するのか、またシリア人との交流が促進されるのかという点については、今後調査を進めていきたい。

次に、フリーペーパーの発行を継続することである。本活動では、第1号として「シリアのお菓子」をテーマとしたフリーペーパーを作成した。今後も様々なテーマを取り上げ、作成・配布を継続することが、シリアに対する意識変化を促すという目的の達成において最も重要であると考えられる。上で述べた読者の反応や意見を考慮しながら、内容の改善を加え、定期的な発行を目指したい。発行を継続する上で最も問題となるのは、継続的に使用できる予算がないことである。この点について、クラウド・ファンディングの使用なども視野に入れつつ、可能性を検討したい。

最後に、シリア人協力者に対して行ったライフストーリー・インタビューを分析し、学術的な場で発表することである。これは、当初本活動の一部として行う予定であったが、予算の関係もあり、実現することができなかった。インタビューおよびそれを書き起こした文字化資料は既にあるため、今後は実践研究や談話分析を専門とする学術界のシリア隊員OV 2名とともに、その内容を分析し、言語政策学会等の関連学会で成果を発表することを目指す。